

氏名（生年月日）	^{オオ} 大 ^{ヤマ} 山 ^{マサ} 真 ^キ 樹（1975年12月3日）
学位の種類	博士（哲学）
学位記番号	文博甲第141号
学位授与の日付	2021年3月17日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	ニーチェの道德批判を導きの糸にした永遠回帰思想の解明— —生きることそのものにおける価値評価と生きることそのもの との原理的な分裂—
論文審査委員	主査 中村 昇 副査 村井 則夫・竹内 綱史

博士論文審査報告書

本博士論文「ニーチェの道德批判を導きの糸にした永遠回帰思想の解明—生きることそのものにおける価値評価と生きることそのものとの原理的な分裂—」は、ニーチェ思想の根幹にかかわる問題について、ひじょうに独創的な解釈によって、解決しようとしたものである。ニーチェの哲学において、いままで一度も明解な解釈がなされていない「永遠回帰」という概念を、「やましい良心の克服」という観点から、まったく独自に解釈し直している。新しい解釈を提示し、この解釈こそ、ニーチェの「永劫回帰」という思想の真の意図だということを、本論文は、まず示す。そして、さらに、その解釈による「永遠回帰」思想が、実は失敗したものであることを、最終的に結論として呈示している。

ようするに、本論文は、ニーチェの最も核となる思想を、ニーチェ本来の意図に沿って解釈し（これは、いままで誰もなしえなかった独創的な解釈の呈示である）、しかも、つぎの段階として、そういった解釈をした上でのニーチェの「永遠回帰」思想は、実は失敗に終わったということを示すというものだ。したがって、本稿は、二段階の仕掛けになっているといえるだろう。最初の解釈だけでも、たいへん果敢な試みであるにもかかわらず、さらにその試みを無化する（失敗であると指摘する）のだから、構造的にも、内容的にも、とてもひねったものであるといえる。このような実に入り組んだ手ごわい内容を、古いものから最新のものまで、とても多くの文献を渉猟しつつ、ひとつひとつ丁寧に論証していく、内容的にも構造的にも、この上なく重厚で骨太の論文だといえる。

<内容>

本論文は、序論、第一論考、第二論考、第三論考、第四論考、結論という構成になっている。以下が目次である。

第一論考 初歩的問題系：人間が道徳に支配されるのはどのようにしてか

第一章 道徳とは何か

第二章 人間の意志の形成は道徳の歴史である

第三章 力への意志という原理はニーチェの批判対象である

第四章 道徳の歴史の許しが下りたとき道徳批判が可能となる

第二論考 方法論的問題系：道徳批判が可能になるのはどのようにしてか

第一章 高貴な道徳と奴隷道徳との通約可能性が意味するもの

第二章 誠実さというパースペクティブの歴史的構成

第三章 「三段の変化」の章の歴史哲学的注解

第三論考 根本的問題系：道徳が批判されねばならないのはなぜか

第一章 生きるということに対する価値評価の利害

第二章 やましい良心の絶えざる可能態としての価値評価

第三章 「救済」の章の非観想的注解

第四論考 中心的問題系：生きることそのものの肯定とは何であるか

第一章 やましい良心を克服するために意志はどのような役割を演ずるか

第二章 回帰する時間において生きることを肯定する時間は死の瞬間である

第三章 永遠回帰思想の意義からの永遠回帰思想の批判

内容を順に見ていきたい。

第一論考は、「人間が道徳に支配されるのは、どのようにしてか」というタイトルである。まず、道徳とは何か、という準備的な考察がなされる。ニーチェの「永遠回帰」の思想を、道徳という観点から解釈するための第一歩であるといえるだろう。ニーチェの考えによれば、感覚知覚に至るまで、「道徳」は人間の意識を束縛している。こうした道徳の支配は、人間一人一人の価値評価に及ぶ。というのも、ニーチェは、価値評価を、道徳の歴史のなかで形成され、共同体の習俗を通じて個人個人の感情や思考を支配する好悪の傾向性だとみなしているからだ。人の価値評価は、道徳の歴史に左右されない時間内部に存続する不変の自然原理や、自然すらも超越した永遠原理によって規定されることはない。道徳は、人間の快樂を抑圧するものであるというよりも、人間の喜びと苦しみをつくりだす歴史の運動なのである。

第二論考は、「道徳批判が可能になるのはどのようにしてか」というタイトルである。価値評価と人間との関係から「やましい良心」が生じる。「やましい良心」とは、本来必要のない「やましき」を意味する。既成の価値評価（根拠のない「善悪」）による「やましき」だからだ。この「やましい良心」を克服するためにも、道徳の批判が必要になる。しかし、どのような臆見が真であるとみな

されるべきかをも道徳が支配するので、この批判には、実に手ごわい認識論の問題が存在している。ようするに、氷に触れたとき熱いと感じるべきか冷たいと感じるべきかは、道徳によって規定されるのだ。氷に触れたとき熱いと感じるのが異常だとされるのは、そうした知覚を間違った病んだ知覚だと評価する道徳が作用しているからなのである。こうなると、道徳を批判することなど不可能であるように思われる。なぜなら、道徳に服従することこそがよいことの基本だからである。

第三論考のタイトルは、「道徳が批判されなければならないのはなぜか」だ。自らの振舞に「やましい良心」を感じることをないようにすることが肝要であり、感じられてしまう「やましい良心」の克服を試みることなど無駄だと考えられるかも知れない。ニーチェは、人間が自らの行為を自ら選ぶ能力、すなわち、自由意志を認めていない。人間は、ただあるようにあるよりほかに振る舞うことはできないと考えている。「手を上げる」のではなく、ただ「手が上がる」のだ。なぜなら、時間のなかで運動や変化を引き起こす作用因であり時間を超越した意志など存在しない。どのような振る舞いも、そうした振る舞いが生ずるか否かは、意志に内在する力によっては、成し遂げられないからである。したがって、やましい良心を感じることはないように振る舞うことはできない。つまり、やましい良心は、感じられるべくして感じられるのである

第四論考のタイトルは、「生きることそのものの肯定とは何であるか」である。こうした自分自身に対する断罪（「やましい良心」）の克服は、円環的時間概念のもとに把握された死の瞬間において、永遠に繰り返して生きることを意志することによってなされる。ここには、誠実さ・死の瞬間・円環的時間概念という三つの重要な概念が介在している。先ず第一に、やましい良心を感じて生きることを否定するためにも、価値評価に対する批判がなされなければならない。そのための道徳的要求が、真理認識を求める誠実さである。こうした真理認識に基づく批判こそ、ニーチェによる道徳批判なのだ。というのも、価値評価という尺度より、生きることそのものに則した生の肯定がなされねばならないからである。次いで第二に、やましい良心を克服するためには、死の瞬間において、自らが生きてきた生を総括せねばならない。というのも、有限な存在者の本質からして、自らの振舞が全て過去になったとき、自らの生にやましい良心を感じていないかどうかを問うことができるからだ。生を総括する以前にやましいところがないといっても、それは、現在の時点で偶然に賽の目の引きがよいだけのことに過ぎない。さらにまた第三に、やましい良心を克服するためには、円環的時間概念のもとで、自らが生きてきたのと同一の生を永遠に繰り返すことが意志されねばならない。というのも、回帰する時間のもとで捉え直されなければ、そもそも取り返しがつかない自らの愚行は、永遠に再会することのない生の回想の一片として美化されかねないからである。実際、自らが犯した過去の愚行を敢えて繰り返そうと意志しなければ、やましい良心を克服したとは言えない。

<総評>

以上内容をざっとみてきたように、本学位請求論文は、「やましい良心」を中心に、ニーチェの目

指した「生そのものの肯定」をニーチェの思想全体を視野に収めながら論じきる大作である。「力への意志」と「永遠回帰」との関係性を独自の観点から総合し、ニーチェの思想全体を「永遠回帰」という概念を中心に再構築しようとしている。「やましい良心」の根本的な批判と克服こそ、永遠回帰の思想へ導いたという解釈が一貫して示される。一般には、後期の系譜学に帰せられる道徳の歴史的考察の源泉を、「力への意志」の議論のうちに求めているのは、本稿の独自性のひとつである。

道徳が「良心のやましさを必然的に生みだしてしまう構造を、ニーチェによる自由意志の否定、世界の偶然性という論点から解釈したのち、その解決のために永遠回帰が要請される。つまり「永遠回帰」は、世界の偶然性にもかかわらず、生をありのままに肯定する方法論として捉えられる。それは同時に、「良心のやましさが生じた過去の出来事を概観し、自らの生をそのまま受容する瞬間、つまり死の瞬間でなければならぬ」と主張される。「永遠回帰」を「死の瞬間」の思想とするこの結論に本論の最も独自の主張があるといえるだろう。

本論の問題提起は、「生そのもの」の肯定とそれを阻む道徳とのあいだの緊張、およびニーチェの歴史哲学というところに認められる。本論全体の議論がその問題を見据え、明確な解決に向かって展開されている点は評価できるだろう。論文の構成は、まずは「道徳」と「習俗の倫理」をめぐる問題提起から始まり、方法論としての歴史的考察、人間の生の根本的偶然性を論じる議論から始まる。そして、その偶然的な生を肯定する論理として「永遠回帰」にいたる。こうした全体を通じて、論者の思考の軌跡が明確に窺えるものとなっている。その具体的手法に関しても、ニーチェ自身の公刊著作のみならず、遺稿を含めたテキストを相互に参照しながら丁寧に読解しようとする姿勢が垣間見える。

個々の論点に関しては、特に「中期」と一括される著作群に明確な区別を設ける主張は、議論の中心的主張とも重なり明快である。また「力への意志」に関する独自の解釈も、本論の特徴となっている。

総評として、一貫した目標設定の中で独自の議論を展開しようとした本論の方向は、哲学的に積極的な意味をもつ。とはいえ、それぞれの論点に関しては、当然まだ吟味が必要な部分があるだろう。特に、従来の解釈とは異なる「力への意志」の理解も検討の余地があるし、歴史理解における原理的問題、永遠回帰の中心的テキストである『ツァラトゥストラ』のテキスト理解も、より慎重な解釈を要するであろう。そして何よりも「永遠回帰」解釈の要となっている「死の瞬間」についても、哲学的にさらに踏み込んだ考察を必要としていると思われるが、全体として哲学的に意欲的な論文として評価できる。

以上の理由により、本論文は、博士学位（哲学）に充分値するものであるといえる。